

文

化

美術館やギャラリーに頼らず展覧会やイベントを美術家が自ら「仕掛ける」ケースが増えている。作品を生む現場を熟知するだけに、鑑賞する側にはない企画運営力が期待される。

学生200人が参加

ピンク色を基調にした幻想的な隅田川の風景に、ビーズをちりばめた油彩画。ガラス張りの高層ビルが映す建設中の東京スカイツリーの写真――

東京・浅草の東本願寺慈光殿で「隅田川新名所物語」と題した展覧会が6日まで開かれている。厳かな仏事のための空間をフレッシュな創造力で彩るのは島田真悠子氏、河瀬太樹氏、吉武弘樹氏ら東京芸術大学の大学院生・学生を中心とした約20人の作品だ。

アートを支える人々

下

展覧会や画廊に新風



美術家、自ら仕掛ける

現場熟知、積極的に企画

目を細める。この展覧会は、3年計画でアートを隅田川周辺の観光のカンフル剤にしようと環境彫刻の作家でもある池田氏が発案し、7月に始まった「GTS観光アートプロジェクト」の一環だ。今は話題のスカイツリ

だが、1年半前、池田氏が周辺を歩いたときには、商店はまばらで夜道は暗かった。そして「アートがあればスカイツリーの見物客が1帯を回遊する」と考えた。助成がついて本格始動したのは今年4月だっ

た。4、5人で始めたが、今や美術学部の半数近い200人が参加。展覧会、映画、スカイツリーの鑑賞スポット設置など18のプログラムが進行し、池

先月29日まで約1カ月間開かれた「脱臼」展。関節が外れるように何かを外れたところに表現の芽があるという視点を生

にアートの拠点として総合オープンした「アーツ千代田3331」。企画展だけでなく、電子工作のための場所を提供する「はんだづけカフェ」な

12月をめどに、東京都墨田区の老人福祉施設のためデイケアの空間をアートで彩る事業を始める。「写真家の池田晶紀さんが撮った地域の写真を床に切り張りしたり、壁に銭湯にあるような絵を描いたりして、空間自体を楽しめるようにする」と中村氏。美術館や従来のギャラリーでは難しかった発想だ。美術家が運営・事業面でも力を発揮し始めている。(文化部 小川敦生)

田氏は「並々ならぬ勢い」を感じている。美術家が従来にない役割を果たすギャラリーも登場した。千葉県柏市の繊維工場跡を転用し今年1月に開いた「island」。オーナーが企画を仕切る通常のギャラリーと異なり、外部の参加者が積極的に企画に携わ

「はんだ」カフェ 東京都千代田区で6月

かしたのは、美術家の磯邊一郎氏と星野武彦氏。迷路の先でやっとな絵画が見つかる今村哲氏の「金城哲男の最終の夢」など9作家の作品が並んだ。「island」を運営するアイランドジャパ

「はんだ」カフェ 東京都千代田区で6月

GTS観光アートプロジェクト「こよみのよぶね」で数字型のあんどんをつくる学生たち(東京都墨田区)

営するアイランドジャパンのプロデューサーで美術家の遠藤一郎氏は「間口を広げれば、アイデアが豊富な美術家も企画に参加する」と話す。